

令和8年度 新たなまちのかたちに関する意見交換会 上戸地区 協議記録

日 時	2026年7月31日（金） 18:00～19:20
場 所	上戸小学校 体育館

参加者：31名

【開会のあいさつ】

吉田区長会長：

今週、東京から被災者生活の調査に来た大学生と市内各地を回っている。若山町上黒丸では、山から約770メートルのパイプを敷いて水を確保し、困っている方のために洗濯機を設置し、自宅の浄化設備へ排水する方式で洗濯支援を行った方の話を伺った。上戸町でも、小学校、公民館、集会所等で多くの方が被災者を支援した。こうした皆様の支援に改めて感謝し、上戸町、さらには珠洲市の復興につなげていきたい。

三盃市議会議員：

復興公営住宅の申込期限が終了したことから、3年を待つのではなく、入居意向を早急に把握し、できるだけ早く整備を進めてほしい。また、災害後に孤立した穴釜集落へ至る市道穴釜線について、復旧計画があれば示してほしい。

泉谷市長：

能登半島地震から2年7か月、豪雨災害から1年10か月余りが経過した。応急復旧から本復旧、復興へと進みつつあるが、生活はなお厳しい状況が残る。今年度、初めての意見交換会として、現在進んでいることを説明するとともに、地域の要望、意見、質問を伺いたい。

復興公営住宅は、上戸町北方で16戸、上戸町寺社で10戸を予定している。上戸町寺社への申込みが多いことから、可能な限り調整を図り、できるだけ早く着工できるよう進めたい。

上戸公民館は、現在の建物を解体して新築する。新しい公民館が上戸町のコミュニティのよりどころとなるよう、アクセスを含め利便性を高めたい。仮の公民館として使用している旧上戸保育所については、時間を要するものの、将来の上戸町の活性化につながる取組ができる施設として活用を検討したい。

「旧 夢つづき」の場所は、子どもの遊び場「すずっこひろば」として活用されている。学校が統合となる場合も、地域と子どもたちのつながりを維持し、上戸町の伝統文化を継承できるよう、上戸地区まちづくり協議会等のこれまでの活動を生かして取り組む必要がある。

インフラ復旧については、進捗状況などご質問があればお答えしたい。市道穴釜線は8月に設計が概ね完了し、年内に入札、発注する予定である。清水地区の農地では、堆積土砂の撤去を今年度も進めており、県が新たなため池を設ける計画を進める。竹中川の復旧は来年度、再来年度にわたる見込みである。山王川河口は今年度中の完了を目指しており、河口の閉塞は現在改善しているが、今後の台風等に備え、被害が生じないよう警戒しながら進める。担当から説明を行い、その後皆様からご要望、ご提言、ご質問等いただき話したい。

【資料説明】

- ・地区別まちづくり計画について
- ・道路、河川、橋梁等の復旧状況について
- ・復興公営住宅及び珠洲市賃貸住宅について

【意見交換】

参加者：

（特定非営利活動法人）ピースウィンズ・ジャパンが運営する「すずっこひろば」は、今後どのようなになるのか。市が飯田高校付近に整備する屋内型の子どもの遊び場へ移行するのか、現在の場所を引き続き活用するのか、見通しを明確にしてほしい。

上戸町北方の復興公営住宅について、建物は素晴らしいと思うが、団地へ至る道路は現在も車のすれ違いが難しいほど狭い。道路の整備も含めて考えがあるのか。

珠洲市：

上戸町北方の復興公営住宅の前面道路及び接続道路については、今後検討を行う予定である。

珠洲市：

「すずっこひろば」は、市内に子どもが安心して遊べる場所がない状況を受け、（特定非営利活動法人）ピースウィンズ・ジャパンに依頼し「旧 夢つづき」で開設していただいた。珠洲市で子どもが安心して遊べる場ができたときには、何らかの形で移行し、珠洲の人たちが自立的に運営していくことが大切だと考えるが、移行の時期や方法は決まっていない。現在も上戸地区の方を含め、土日には70～80人程度が利用している。

市長：

現在の建物を解体する必要がある健康増進センターが、将来的には「旧 夢つづき」に移転する予定である。

参加者：

資料に記載されている「ひまわりプロジェクト」などがコミュニティの再生となり、「すずっこひろば」がまちの財産になっているわけではなく、次第に変化していくと考えればよいのか。

市長：

その通りである。「すずっこひろば」は仮の施設という位置付けである。

参加者：

上戸町は高齢者が多いため、高齢者に優しいまちづくりを目指してほしい。公民館へ至る道路には、手押し車、シルバーカーが通れる歩道を設け、道中に屋根付きの休憩所を整備してほしい。

旧上戸保育所を、防災モデル地区の拠点として、避難生活を体験できる宿泊施設に活用してはどうか。断水や停電を想定した体験ができる施設とし、保育所の裏側は大規模な防災公園として整備してほしい。防災公園には、川の水を利用し断水時にも使えるトイレや浄化槽、炊き出し用のかまどを備えたベンチ、避難者が集まりテントを張れる場所を設ける。平常時は、高齢者のグラウンド・ゴルフ、ランニングや散策に利用できるようにする。上戸町を代表する「倒さ杉（さかさスギ）」、旧上戸駅の国際芸術祭作品、蛍が見られる自然なども生かし、都市部から訪れる人の心を癒す観光資源と結び付けたい。運営方法はNPO法人等も含めて検討し、復興公営住宅の整備だけでなく、住みやすいまちづくりを考えてほしい。

市長：

公民館を新築する際には、アクセス道路も含めて利便性を高めたい。旧上戸保育所については、活性化施設に加え、地域が自立して様々な活動を行える防災拠点や防災公園とする話があった。旧上戸保育所をどのように活用していくか、地域の皆様と相談しながら考えていきたい。

跨線橋下のグラウンド・ゴルフ場は、現在、応急仮設住宅となっている。仮設住宅の入居者が自宅再建や復興公営住宅への入居を終え、仮設住宅の役割が終了した後は、グラウンド・ゴルフ場として再生したい。上戸町内の他の提案についても、地域と相談しながら取り組む。

参加者：

上戸町南方の農村児童公園は、地域住民の憩いの場であり、保育園児や小学生の遠足、昨年からはクローバークラブによる4コースのグラウンド・ゴルフの練習に利用されている。近くの穴釜集落、神道集落、随念集落、名山集落、清水集落の5集落が管理運営委員会をつくり、分担金と区長会の助成を基に、年3回程度の草刈りなどの公園管理をしているが、震災後に世帯数が減少し、維持管理の負担が重くなっている。

公園中央の水銀灯は電気使用量が多いため、LED化して電気代の負担を軽減してほしい。また、公園のトイレは和式で、高齢者や子どもが利用する際の衛生面、安全面に不安があるため、洋式の水洗トイレに改修してほしい。

市長：

上戸町南方の農村児童公園には一部地割れがあるため、災害復旧と合わせて対応できるか確認する。照明のLED化は担当課で持ち帰り検討する。トイレ周辺の水道等の損傷は修復済みであり、地域の方が清潔に管理していることも承知している。屋外トイレを洋式化するには、トイレ全体の改築が必要となる可能性があるが、高齢者の利用も多いことを踏まえ検討する。

参加者：

上戸町随念の生活改善センターは地震で大きな被害を受け、もともとの老朽化も進んでいる。市有施設であるため大規模修繕は市にお願いし、小規模な修繕は地域で対応しながら維持している。

地震の際には、上戸小学校や旧上戸保育所などの正式な避難所が遠く、避難が難しい高齢者等のため、急きょ避難所として使用させていただき、大きな助けとなった。広い和室があり、地域の会議、町内会総会、公園管理委員会の会議だけでなく、他集落や各種団体も利用している。今後の災害時にも重要な施設となるため、修繕とバリアフリー化を進めてほしい。

地域では毎年1万円ずつセンター費を積み立ててきたが、集落の世帯数は以前の16軒から8、9軒に減り、将来は5、6軒となる可能性もある。屋根は修繕していただいたものの、雨漏り等があるほか天井に大きな穴があり、畳も傷んでいる。利用頻度は高いが、今後、地域だけで維持管理を続けることは難しいため、市有施設のまま必要な整備と支援を続けてほしい。

市長：

平成17～18年頃の行財政改革では、農林水産省等の補助を受けて整備した多くの集会施設を地域へ移管し、地域で修繕、管理していただく形とした。上戸町随念の生活改善センターは、市有のまま残っている数少ない施設である。必要な箇所を修繕し、外から利用できる洋式トイレやバリアフリー化を整備した上で地域へ移管する方法も考えられる。

参加者：

地域への移管については、世帯数が減少する中で将来にわたり維持できるか、私一人では回答できず、集落全体での相談が必要である。できれば、市有施設のまま整備していただきたい。

市長：

修繕、バリアフリー化、施設の所有と維持管理の在り方を含め、今後、地域と十分に話し合いたい。

参加者：

上戸町神道の橋は今年度中、その他のインフラは3年程度で復旧を完了するとの説明があったと理解しているが、入札不調が続く中で本当に実現できるのか。上戸町神道の橋及び全体の復旧見通しを改めて示してほしい。

小・中学校の統合について新聞等で報道されており、上戸小学校は残らないように感じている。上戸小学校の今後を改めて説明してほしい。

市長：

上戸町神道の橋は8月に設計を完了し、年内に入札する予定である。工事はその後となるため、まだ時間を要する。冬を迎えることへの地域の不安も承知しており、大規模な工事となるが、できるだけ早く完了できるよう進める。

学校のあり方については、6月30日に検討会を立ち上げ、小・中学校の保護者や、つばき保育園の保護者等を含めて議論を始めた。統合を求める声は非常に強い。一方、市内に小学校1校、中学校1校だけとなると、学校に通いづらい児童生徒に選択肢がなくなるため、小学校、中学校のほかに義務教育学校を残すことなども検討する必要がある。

大谷小中学校は児童生徒が4人であるが、児童生徒、保護者、地域から存続を求める声が強く、残したいと考えている。その上で、宝立小中学校をどうするか、みさき小学校、三崎中学校をどうするかが課題となる。三崎中学校は現在、1年生と3年生が在籍しているが2年生がいない。来春に新入生がいなければ、現在の1年生が2年生となり、一つの学年だけの中学校となるため、早期に統合すべきか結論を出す必要がある。みさき小学校についても、距離を踏まえて残すのか、新しい統合小学校へ通うのかを検討する必要がある。

昨年末から年明けにかけて各小・中学校の保護者と意見交換を行った。上戸小学校の保護者からは、現在の学校のあり方が非常に良いという声があった一方、全体として統合となるのであればやむを得ないとの意見もあった。ただし、急いで進めるのではなく、統合となった場合でも上戸町と子どもたちの絆を維持することが重要である。仮設住宅の方々も、体育館で上戸小学校の子どもたちがミニバス等に取り組む声を聞くことで元気を得ていると思う。残せるのであれば残したい思いはある。

一方、珠洲市全体の出生数は一昨年が35人、昨年は20人であり、その子どもたちが小学校に入学するまでに学校体制を整える必要がある。緑丘中学校の敷地内に小学校を新設するのか、近隣に用地を求めるのか、グラウンドや体育館も含めて検討する。財源の見通しはあるものの、相当な費用を要する。

現在の全ての学校を20年先まで維持する場合、上戸小学校だけでなく、飯田小学校をはじめ各校の建て替えが必要となり、財政負担は厳しい。新設、統合を含め、子どもと保護者の双方が希望を感じられる学校としなければならない。同時に、公民館活動や地域団体の活発な活動を生かし、地域と子どもたちの結び付きを維持したい。

参加者：

高齢者に優しいまちづくりの観点から、海側の道路を通る循環バスを設けてほしい。現在、定時の北鉄バスは山側の道路を通り、停留所も少ない。仮設住宅を通るバスはあるが、海側を走るバスがなく、以前、海側には上戸町南方、上戸町北方など複数の停留所があったが、現在は利用できない。停留所まで500メートル程度歩くことを求められても、手押し車、車いすやシルバーカーを使う高齢者には難しい。

珠洲市：

現在、海側の道路は復旧状況が良くなく、マイクロバスが通行できないため、山側の道路を運行している。秋からAIデマンド型交通を導入する予定であり、小型のワゴン車で海側も回れる形を検討したい。道路状況が改善するまではマイクロバスの運行は難しく、運転手不足の課題もあるが、今後は順次対応する。

参加者：

山王川の太右エ門橋と光真橋の間に住んでいる。地震後、光真橋は通行してはいけないうような状態であるが、他に通る場所がなく、住民は恐る恐る通行している。周辺では住宅再建も進んでいるため、太右エ門橋と光真橋の完成時期を教えてください。

珠洲市：

太右エ門橋と光真橋は契約を締結し、工事を進めている。現時点では12月頃の完成を想定しており、できるだけ早い完成を目指す。状況が変わった場合は、地域へお知らせする。

太右エ門橋は、現在、横に迂回路を設けている。既設橋を撤去して工事を行うため、先に仮橋を完成させ、仮橋へ交通を切り替える。調整事項が増えているが、年内完成に向けて進める。

参加者：

各地で工事が遅れており、なかなか進まないのではないかと感じている。市が旗を振って復旧を進めてほしい。

市長：

工事の進捗を確認しながら、早期復旧に向けて引き続き対応する。

参加者：

東日本大震災でのボランティア活動の経験から、行政から言われるのを待たずに動くこと、住民同士が助け合い、支え合うことが重要だと感じている。仮設住宅や復興公営住宅へ移った後も、身の回りの生活を支えるのは地域の助け合いである。「長寿園」や「こすもす」など、これまで世話になった介護・福祉施設が5年、10年先も地域でサービスを続けられるよう、行政としてどのように対応するのか。

市長：

安心して年齢を重ねられる地域とするため、介護・福祉サービスの再構築は非常に重要である。震災を機にスタッフが減少し、マンパワー不足が生じている。スタッフに長く働いていただくための支援や、新たな人材に珠洲市へ来ていただくための取組を進めている。

珠洲市：

今年度、介護保険事業計画の見直しに向け、各施設と話し合い、介護サービス低下の課題を一つずつ整理している。はっきりとしたことは言えないが、住み慣れた珠洲市の自宅で安心して生活できるよう、施設と協議しながら対応を進める。

参加者：

上戸町神道につながっている道の崩れている坂道は、下りる際に非常に怖い。道路の左右が崩れ、ガードレールもない。本格工事までの間に、少しでも安全に通れるよう、ガードレールなど応急的な対策をしてほしい。市長にも現地を見てほしい。

市長：

何度も通行しており、危険な状態であることは承知している。本格復旧は大規模な工事となるが、工事前に安心して通行できる応急的な対策がどこまで可能か、担当課が現地を確認して検討する。

珠洲市：

翌週、地域の方と一緒に現場を確認する。

参加者：

上戸町穴釜の奥、清水川沿い上流部の土砂が堆積した農地は、いつ復旧するのか。

珠洲市：

清水川沿い上流部の農地には土砂が堆積している。現在、河川工事を進めており、その進捗を踏まえて水路を確保し、農地の土砂を撤去する。さらに上流部でも撤去工事を行っており、いずれも今年度中の完了を目指す。

参加者：

清水地区上流の農地について、耕作放棄地として荒れ地のままにするのか、農地として復旧するのか、新たなため池の用地とするのか、方針がまだ流動的に見える。自分の農地だけでなく、上戸地区全体の農地を少しでも元の状態に戻してほしい。自分自身にも営農を続ける意思があるため、農地所有者の営農意欲を大切に扱ってほしい。

大向橋から上流部の農地に関することである。大向橋付近には、上戸平野の農地へ広く用水を送るため、川の水をせき止める取水施設があり、その確保に向けた復旧工事が行われている。他の農地では、重機が通る際に鉄板を敷き、田を踏み固めないよう丁寧に施工しているが、この上流部では鉄板

を敷かず農地を重機が通行している。将来、農地として復旧するのであれば、鉄板を敷くなど、農地を傷めない施工をしてほしい。

豪雨後、田の中央が川のように浸食され、当初約1メートルだった段差が、放置される間に約2メートルまで深くなった。農地として復旧する際に、これほど深い箇所へ土を盛ることで問題がないのか不安である。農地は農地として丁寧に扱い、施工業者にも農家の気持ちを理解してほしい。

集落中央の旧道は、数軒の住宅とごみ収集場所を結ぶループ状の生活道路であったが、地震と豪雨で道路の半分が崩れ、通行できず、直線の一本道しか使えない状態である。利用する住宅が少なくても、住民の生活とごみ出しに必要な道路であるため、石積みや舗装等により通行できるよう復旧してほしい。農地や生活道路を利用する被災者の思いを施工に反映してほしい。

市長：

上戸町清水の奥にある既存のため池の復旧が難しく、下流側に新たなため池を設ける場合、新しいため池より下流の農地は復旧できても、上流側の農地は水源の確保が難しいのではないかと考えている。

珠洲市：

清水川上流に取水のための堰堤を整備する方向である。新たなため池より上流の農地は、山の湧き水や従来の山中の水源等を利用する必要がある。営農意欲がある場合は、個別に詳しい状況を確認し、対応を検討する。工事中の農地の扱いについても現場を確認する。

参加者：

自分の農地を残した場合、その目の前がため池の堤体となる可能性があり、ため池に接する農地は農家として歓迎しない。一方、地域全体の利益のために必要であれば、自分の農地もため池として提供するという話もあり得る。この一帯は自然がそのまま残っており、子どもを遊ばせるのにも良い場所であるが、目の前に池ができれば安全上の不安が生じる。総合的に考え、ため池の線引きを決めてほしい。

市長：

ため池の位置はまだ確定していない。県と連携し、地権者及び地域の皆様と協議しながら進める。

市長：

祭礼用の倉庫や格納庫など、祭事・地域文化に必要な施設の復旧、再建についても、必要なことがあれば相談してほしい。

参加者：

現在、計画を作成し、市と協議を進めている。引き続きお願いしたい。

参加者：

2か月前に移住してきた。北海道出身で、移住前は東京で生活していた。来週、清水集落を本社所在地として登記する予定である。隣の茅葺き屋根の物件も、水循環に関する会社の方が購入している。清水集落の風景に強く心を動かされ、物件を購入して移住した。

復興に当たっては、他地域では見られない美しい景観を大切にしてほしい。河川の氾濫リスクとの両立は必要であるが、コンクリートで一律に固めるのではなく、可能な範囲で自然に配慮した工法を検討してほしい。この美しい自然は、地域外の人や東京等の企業を誘致する上でも大きな魅力となる。

建築関係で建材開発に携わってきた経験を生かし、能登で新たな建材・キッチンメーカーを始める。家庭用ではなく、公園や広場に遊具のように設置し、誰でも使えるキッチンを想定している。平常時は住民が料理や交流に使い、釣りの帰りや農作業の合間にも利用できる。災害時には炊き出しの拠点となる設備にしたい。元日の震災を通じて炊き出しの重要性を実感し、この事業を能登から始めたいと考えた。

炭火の七輪を組み込めば、魚をおいしく調理でき、災害でインフラが断絶した際にも使用できる。切り出し珪藻土の事業者は閉業しているが、道具や技術を知る方が残っているため、珪藻土を掘る練

習をしている。地域に残る道具や技術を学びながら、能登の切り出し珪藻土という貴重な産業の継承にもつなげたい。オフグリッド施設に必要な建材等についても、これまでの人脈を生かして協力できることがあれば協力したい。

市長：

新しい事業として、ぜひ取り組んでほしい。創業支援には上限 1,000 万円の補助制度があるため、活用を検討してほしい。旧上戸保育所については、オフグリッドの取組や防災拠点の話も出ており、今回のキッチンの構想と関連性がある。事業として取り組むだけでなく、上戸地区全体のまちづくりにも関わっていただきたい。

市長：

旧上戸保育所をどのように活用するかは、今後の上戸地区のまちづくりにおける重要な要素である。上戸町南方の農村児童公園と上戸町随念の生活改善センターの在り方についても、地域としっかり協議したい。新たな移住者からも様々なアイデアを出していただきたい。

復旧工事を着実に進め、復興公営住宅もできるだけ早く整備する。同時に、将来の上戸町をどのようなかたちにするか、地域の皆様と意見を交わしながら、上戸町の再生と復興を共に成し遂げたい。

以上